

第10回 市民動物園会議

会 議 録

日 時 : 平成22年9月16日(木) 14時開会
場 所 : 円山動物園内 動物園プラザ

1. 開 会

○原田委員長 それでは、お集まりのようでございますので、始めさせていただきます。
林委員はおくれるということです。

まず最初に、資料の確認を動物園側からしてください。

○事務局（酒井円山動物園長） 皆様、本日は、お忙しい中にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

第10回市民動物園会議を開催させていただきます。

前回、委員の皆様からご意見をいただきました中で、特に来年度には円山動物園は60周年を迎えるということで、その事業の予算要求前に皆様から意見をちょうだいして、それを予算要求に反映してはどうかということがございました。当初、8月という予定でございましたが、開催がなかなか難しく、この時期になってしまいましたことをおわび申し上げますが、まだ予算要求には十分間に合いますので、本日、またご意見を賜ればと思います。

あわせて、前回の6月の会議以降、動物たちもたくさん生まれておりますし、入園者の状況や運営状況についてもこの3カ月の報告をさせていただければと思いますので、よろしく願いいたします。

ちょうど林委員もお見えになりました。

続きまして、この7月1日付で私ども円山動物園の経営管理課に高橋調整担当課長が着任いたしましたので、高橋から自己紹介をいたします。

○事務局（高橋調整担当課長） 7月1日から動物園に配属になりました高橋と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

6月までは、APECの貿易担当大臣会合がございまして道庁に派遣になっておりました。それが終わって少しゆっくりできるかと思ったのですが、動物園に行きなさいということで、7月1日からこちらにお世話になっております。

委員の皆様には、これからいろいろお世話になると思いますけれども、今後ともひとつよろしく願い申し上げます。

2. 議 事

○事務局（酒井円山動物園長） それでは、引き続きまして、私から資料の確認をさせていただきます。

1枚目に次第がございます。2枚目に本日出席の委員名簿がありまして、7名となっておりますが、大変失礼いたしました。林委員が欠席となっておりますが、出席でございますので、訂正させていただきますと思います。資料2は、平成21年度の運営状況です。資料3-1は、グラフになっておりまして、平成22年度入園者の状況です。資料の3-2は、韓国テジョン市との姉妹都市提携に伴う動物交換ということで、写真つきのものでございます。資料3-3は、主な新着動物出産の状況等でございます。裏面に今年生まれ

た赤ちゃんたちの写真が入っております。一番最後の資料4は、本日のメインの議題でございます60周年記念事業の骨子案についてとなっております。

本日は、この資料に沿いまして、会議を進めさせていただければと考えてございます。

それでは、資料2の平成21年度の運営状況についてでございます。

これは、6月の第9回の際に決算状況及び寄附受理の状況について説明させていただいてございますが、決算見込みの状況での資料を委員の皆様にお渡ししておりました。しかし、今回は確定ということで、この資料を改めましてつけさせていただきます。

決算見込みとほとんど変わってございませんが、2009年度の数字が前回の決算見込みでは3億3,414万7,000円だったものが、3億3,454万8,000円ということで、約40万円がプラスになったところが変わっております。

寄附受理の状況でございますが、アニマルファミリーの決算額が593万円と確定いたしました。前回は、595万2,000円とご説明しましたが、決算額は2万円ほど下がった形になってございます。それと、下の段で変わったところは、合計の上のその他の支援です。見込のときには1,668万3,027円でしたが、1,666万1,027円と若干下がった金額になってございます。

21年度の運営状況の説明については、以上でございます。

○原田委員長 ありがとうございます。

議題(1)は、平成21年度運営状況報告でございます。

これについて、委員の皆様からご質問やご意見はございますか。

○服部副委員長 寄附金の受理状況の中で、20年度と21年度にわたる件数の推移はどのようになっていますか。これは大変大事なことだと思うのです。額はふえているけれども、件数も相当大幅にふえるのか、件数は横ばいで1件当たりの金額がふえているのか、この辺の状況を教えていただければと思います。

○事務局(嶋内経営管理課長) 経営管理課長の嶋内でございます。

寄附金に関しましては、記載のとおり、アニマルファミリーとその他というくくりになっております。アニマルファミリーを除く部分の寄附金について申しますと、平成20年度は134件で、平成21年度が174件になっております。

○服部副委員長 これは企業、団体、市民を合わせてですか。

○事務局(嶋内経営管理課長) そういことです。

○服部副委員長 企業、団体、市民の細かい数字はわかりますか。

○事務局(嶋内経営管理課長) 平成21年度のうち、企業・団体にかかわるものにつきましては105件で、一般の市民・個人は67件となっております。平成20年度については、企業・団体が97件、一般の市民・個人が37件でございます。

○服部副委員長 その他の支援は、市民、企業、団体でもないということになると、どこからの寄附になるのですか。額が大変多うございますね。

○事務局(嶋内経営管理課長) その他の支援は、グッズ売上、売店収益以外の寄附金で、

主に円山動物園を応援したいという企業からの寄附で約400万円の大口の寄附金が1件含まれています。

○服部副委員長 申し上げたいのは、底辺の拡大を図っていくべきだろうと思うのです。数多くの方々から寄附を受けるということは、動物園がそれだけよく見られているし、よく関心を持たれているし、関心どころか協力したいという申し出が結構ふえているということになれば、将来に向けての安定した財源としての位置づけになります。しかし、ぽんと大口ということになれば、極端に言えば、2,300万円が1件で終わってしまったとなれば、来年度以降の寄附の位置づけが非常に弱くなります。それに対する園側の対応策、あるいは、アニマルファミリーへの対応はどのようにするのかということは、数字から戦略が作り上げられるのだろうと思うのですけれども、どうでしょうか。

○事務局（酒井円山動物園長） 寄附については、具体的に動物園の魅力アップなり、取り組みに支援したいという目的を持った寄附でございます。ほかの市民の方々からいただいている寄附は、えさ代にしてくださいというものが多くなっています。

委員もおっしゃいましたように、目的を持ってこの部分をぜひ応援したいという市民がふえておりますので、そういう形で市民の方々が具体的に寄附していただくような基金づくり、仕組みづくりをまずはきちんとやっていきたいということが一つでございます。

それから、アニマルファミリーについては、私どももまさに悩んでいるところでございます。と申しますのは、寄附の額も非常にふえてきてございますし、人数もふえてきております。ただ、当初から参加されているお客様はアニマルファミリーに対しての要望も非常に強くなってきております。イベントや通信など、私どもではいろいろサービスをしているのですけれども、必ずしも新鮮味を持った企画を次から次へと打ち立てられるわけではございません。平たい言い方をすると、かなりネタ切れの状態にもなってきております。また、飼育員も毎月、毎月、レポートなどを非常に工夫して書いているのですが、出産しましたなど大きなイベントがあればともかく、毎日を平穏な中で暮らしている動物のどういふところにスポットを当てて、どうお伝えするのかというのはなかなか難しい問題になってきております。

この先のことを幅広く、より支援を多くいただける仕組みにしていくために、アニマルファミリーはどのようなふうにすればいいのか、まさに議論を始めたところでございます。これは、まだ結論は見出せておりません。以前、委員長からも再三お話がありましたように、ライブカメラのようなもので、手間がかからず、余りコストもかからないようなサービスを付加してはどうかというご提案をいただいていることは重々承知しておりますし、そういったものも含めて、どうやったらたくさんの方に参加していただき、満足していただけるのかというところをさらに詰めていかなければならないと思っております。

○服部副委員長 基本計画案の中で考えている行動指針の一つのわたしの動物園という視点から、アニマルファミリーが会議の中でも非常に重要な位置にあることは重々わかっておられるだろうと思います。そういったわたしの動物園づくりをきちんと描いていくと、

アニマルファミリーの数もふえていくし、寄附も、額は別としても、ふえていくと思います。1円の寄附でも、それが何万件と来るといことがわたしの動物園という位置づけの評価につながっていくと思うので、件数を聞かせていただこうと思ったわけです。ですから、件数にはもっとシビアに、謙虚に、それを動物園側の一つの動き方に位置づけほしいということで、数字をきちんと把握しておくべきではないかということで申し上げたわけです。職員の皆さんに数字を絶えず開示していく、情報を共有していくことが大切だろうと思います。そういうことをぜひお願いしたいと思います。

○原田委員長 ありがとうございます。

それは可能ですね。この数字が何掛ける何で出てきたのかということでございます。

それでは、ほかにございませんようでしたら、議題（2）に参りたいと思います。

議題2は、平成22年度運営状況等の報告をお願いいたします。

○事務局（酒井円山動物園長） 資料3-1をごらんいただきたいと思います。

月別の入園者数と累積でございます。平成18年度から22年度まで、22年度は8月までの数字でございます。

一番下のグラフを見ていただきますと、濃紺の昨年のグラフの下に今年度の8月現在までの数字が書いてございます。上の表で見ますと、4月が約4万人弱、5月が15万人、6月が9万7,000人、7月が8万人、8月が11万5,000人でございます。

きのう現在で、入園者数は56万人になっております。恐らく、このままいくと、今月末で六十三、四万人ということで、前年同月比マイナス10万人ぐらいになるのではないかと考えております。

この数字を見ますと、4月はここ数年で最低の数字でございました。記憶と当時の天候を見てみますと、4月になってからもずっと雪が降り、お客様の出足が悪かったということです。5月の最初ぐらいまではそのままでしたが、その後は大分回復して取り戻した感がありますが、それでも昨年に比べると二万数千人に下がりました。6月は天候が回復しまして、昨年を上回る数字を上げることができましたが、7月に関しましては、土・日に雨が特に多かったですし、8月は非常に高温であって、お客様の足がなかなか伸びなかったと考えてございます。9月に入りまして、今のところは非常に天候がよく、昨年を上回っている状況です。

右側の累計の入園者を見ていただきますと、先ほど申しましたように、現時点では昨年度比で10万人ほど下がっております。仮にこの差がこのままでいきますと、22年度は21年度に比べまして10万人減ということで、80万人ぐらいが現時点において見込まれる数字かと考えてございます。

前回申し上げましたように、今年度の入園者の目標は90万人です。昨年は92万人でしたが、基本計画ベースで考えますと、今年度は90万人を目指す年だろうということです。しかし、掲げた目標と比べましても、このまま何も手を打たなければ90万人は10万人ほど割り込んでしまうという予測になっております。私どもとしましては、これから

お客様の足が遠のく10月、11月以降、特に冬の動物園にさらなる企画を盛り込みまして、何とか10万人を埋めていく努力をしたいと考えているところでございます。

現時点における入園者の状況は、以上でございます。

○原田委員長 ありがとうございます。

今年は90万人という計画で、今のままでいくと80万人ぐらいにとどまるのではないかという予測の話でございます。

これについて、ご質問等はございますか。

○服部副委員長 数字のことで、また意見を述べさせていただきます。

10万人減の予測という描き方で、今後はほぼ前年並みに推移していくというところなんでしょう。しかし、4月から8月の5カ月間の中で考えると1勝4敗ですね。4月は前年割れ、5月も前年割れ、6月は前年を超えましたが、7月は前年割れ、8月も前年割れです。これは、私ども民間レベルからいくと非常に危機的な状態です。経営的な面で売上げが下がっていると見なければなりません。

今のところ、9月は盛り返しそうだということですがけれども、今、園長からお話がありましたように、具体的にこれをやっていく、こう仕向けていくというものを腹案として持っていないと、遅いのです。もう冬場に入ってしまうので、天候が悪い、天候が悪い、天候が悪いということで、天候が回復したときはアップしているけれども、天候が悪ければダウンということになります。もし、今後も天候不順が来ることが予測されるのであれば、10万人割れどころか、20万人割れも考えておかなければならないという思いです。

これは一つの意見であり、私の考え方ですがけれども、早目に対策をするということですね。園の職員の方々に対して危機的な意識の伝達を仕向けていくことであろうと思いますし、この5カ月間は、天候のせいにするだけではなくて、何が足りなかったのかという問題点、課題を皆さん方から意見をいただきながら、今後の集客、あるいは入園者の満足に向かって進んでいただければと思っております。

○原田委員長 ありがとうございます。

何かご意見はございますか。

○林委員 副委員長が厳しいことを言うので、私は守りの方に回りたいと思います。

動物園で最悪なのは暑さだと思うのです。動物園好きでも、暑いときの動物園は、動物もだめだし、人間もだめなのです。恐らく、札幌市民のイメージの中に、この坂道を登るのかと、立地条件を含めて暑さは大きな問題だということなんです。

副委員長の言葉をかりれば、今後の対策として、来年も当然暑くなるわけで、暑いからしょうがないということは企業人として、経営としてはどうだろうかということなんです。失敗は次の課題につながりますから、来年に向けて暑さ対策はどうするのかということはいっつきり明確にしなければいけないと思います。

あるところでは、水を流して氷柱で呼ぶということがありました。私もどさんこワイドをやっていましたが、猛暑のときはたとえ街中でも視聴者になかなか集まっていただけな

いのです。これはしょうがないです。炎天下でテレビに出るかということです。そのときに、番組プロデューサーと交渉して、涼を楽しんでもらおうということで、駅前に氷柱を買ってきたのです。そうしたら、テレビとは全然関係がなく集まって頂けたのです。人間というのは、何かがあったら、または気分転換に涼を求めて行こうかなということがあると思うのです。ですから、そういう切りかえは必要かと思えますし、失敗は次の課題になるということが一つです。

もう一つは、メディア露出に関してです。

去年はホッキョクグマがありまして非常に幸運に恵まれていたわけですがけれども、ことはそういうことがないです。そのことは別ですし、私どもメディアも余り取り上げることがないということもあるのです。しかし、今の副委員長の話ではないですがけれども、メディア露出を次の秋に向かってしっかりされた方がいいのかなという気がします。

今年は、ヒグマのこともありますし、オオカミのこともありますし、オラウータンのこともあります。まとめて言うと、ホッキョクグマ一本で勝負した去年に比べて、足し算をすると、それなりになると思うのです。一本でやっていたものが、今年は足し算でいくということです。そして、秋ですからちょうど見ごろです。今年の暑さで紅葉は期待できないですが、そこを足し算でメディアにリリースしていただくということがあれば、STVも食いつくし、ほかのところも食いつくのかという気がします。今年は夏に行っていないから子どもを連れていこうという思いにもなるでしょうし、そういうウエルカムメッセージは勝負時かと思えます。

○原田委員長 ありがとうございます。

その辺はいかがですか。

○事務局（酒井円山動物園長） まさにおっしゃるとおりでございます。

今週末から始まりますいのちの感謝祭は、林委員におっしゃっていただいたように、新しい動物、特にオオカミ、オラウータン、レッサーパンダ、ゼニガタアザラシと立て続けに赤ちゃんが生まれておりますので、生まれたときのエピソードを含めて、再度、飼育員の口から語ってもらうという企画もやっております。そういうことを通じて、改めて動物園の魅力を発信していきたいというのが今の考え方です。

それから、今、レッサーパンダが本当にかわいい盛りですが、まだ十分に産箱から出てこられないのが非常に残念です。きのうぐらいから体重測定などを一般のお客様に見ていただくような形で、ちょっとずつは見ていただけるようになっておりますが、恐らく、10月の初めぐらいから自分の足で産箱から出て、お客様に見ていただけたらと思います。これも、ホッキョクグマに負けないぐらい非常に魅力的な動物でございますので、これから秋にかけて、円山動物園としてはぜひ売っていきたくと思えますし、林委員のSTVを初め、さまざまところでぜひ取り上げていただければと思っております。

また、先ほどの服部副委員長のお話もそうですし、やはり天気、暑さ対策ですね。去年は冬の寒さ対策を頑張ってみましたが、来年には暑さ対策もやると同時に、天気にも負けない

い動物園を考えていければと思います。今年のゴールデンウィークの前にお話をしましたとおり、1万2,000人も来ていた昨年でしたが、雨が降って寒いということで、389人しか来ないということが私どもの動物園の一つの特徴です。やはり、もうちょっと天候に左右されずに来ていただけるように、一定程度はツアーの中に組み込まれるとか、天気に左右されないで動物を市民にもっと見ていただける施設づくりなど、両面から足腰を強くしなければならぬと考えています。

特に、観光客誘致については、冬というのは一つのハンデではございますが、道外、国外の方にとっては一つの魅力的な商品になるのではないかという思いもございます。例年やっておりますが、今年はそこを強く打ち出していくような企画を立てていきたいと考えてございます。

その辺は、後ほどまたご説明させていただきたいと思います。

○原田委員長 レッサーパンダは、ホームページのムービーがなかなかかわいい姿を映しているのです。ライブではないので、いつのだろうかということはあるかもしれませんが、あれを見ると、早く見たいなと皆さんも思っているのではないかと思います。そういう情報をメディアにどのようにうまく乗せていくかが大事なところだと思います。

ホームページに載ってしまうとメディアもそちらを見ればいいではないかとなるわけですから、次々に前もってメディアに載せて、ホームページに露出していくというような段階的な戦略が必要なのではないでしょうか。それが細かく、きょうは何、あしたは何ということではないかもしれませんが、次々と漏れなく載せていくことが必要なのではないかというような気がいたします。

あとは、先ほど出てきましたけれども、ライブで現在の動物たちの様子を何とか見せられないかということです。ファミリーにとっては、うちの子はどうしているのかを一番見たいところだと思うのです。ほかの動物よりも先んじて、うちの子の姿を見たいということです。しかし、結局、レンズを通してのことなので限界がありますから、今度の日曜日に行こうとなって、動物園に来られるというような循環サイクルをつくり出していくということで、暑いときでも寒いときでも有効に働くメディア戦略であろうと信じて疑わないわけです。

当初言っていましたように、ズームアップをしたり、首を振ったりという設備をPCなどでできなくても、飼育員がマニュアルで時々チェックするぐらいのことであっても、結構有効なつなぎとめの方法になるのではないかと思います。人手がかからないし、新たなイベントをつくるのは結構大変なことだと思うのですけれども、これは、年がら年じゅう、動物がイベントを自然につくり出していくのです。これは、徹底してやっているところは余り多くないですが、部分的にやっているところはあるのです。これを徹底してやるということが必要なのではないかと思います。

この前、費用がかかるというお話を聞きましたけれども、今、非常にローコストで、小さなカメラでもかなり鮮明に映ります。また、それを蓄えておく必要もありませんで、ど

んどんと流すわけです。そういうことを考えますと、もう一度じっくりと実行計画を検討されてはいかがかと思います。これも、後ほどのことではないかと思います。

○事務局（酒井円山動物園長） その後、新しい技術、サービス等も出てきておりますので、そういうものを研究してございます。また、古い獣舎になると配線工事が伴うという意味で経費がかかるというお話をさせていただきましたが、爬虫類館以降のアジア館、アフリカ館も含めて、通信回線、LANの回線が獣舎の中でも非常に重要だと考えておりますので、これらについては対応する方向で考えております。ですから、将来的にはそういったことが簡単に実現できると思っています。あとは、現状、どうするかということを検討させていただきたいと思います。

○原田委員長 ただいまの件はよろしいでしょうか。

ほかにございませんか。

○いがらし委員 林委員が来年のことも踏まえてとおっしゃっていたので、お話しします。たしか、春ぐらいに、家庭菜園ではないですけども、動物園の畑に野菜を植えるという話はありませんでしたか。

○事務局（酒井円山動物園長） やっております。今、畑が2カ所あります。

○いがらし委員 それはどなたが管理しているのですか。

○事務局（酒井円山動物園長） 管理はもちろん動物園でしておりますが、実際にお世話をしているのは児童会館の子どもたちにやっていただいております。

○いがらし委員 それはメディアに行きましたか。

○事務局（酒井円山動物園長） プレスはしています。

○いがらし委員 ごめんなさい。夜中しかテレビを見ないので。

今、私もはまっていて、すごくシミだらけになっているのですけれども、やはり楽しいのです。収穫した野菜を動物たちにあげるというのは、子どもたちにとっても物すごくいい経験だと思うのです。アニマルファミリーを大々的に家族連れでやっているとか、そういう子どもたちが絡んでいるのであるならば——私がちゃんとメディアを見ていませんでした。

○事務局（酒井円山動物園長） 周知不足だったかもしれません。今週の土曜日に野菜の贈呈式がございまして、子どもたちから収穫したものを受け取ることになります。

○いがらし委員 帰り際に畑を見ていこうと思ったのですけれども、そういうことがメディアに乗ったことを来た人たちにもわかるようにした方がいいですね。動物園で野菜をつくって、子どもたちが収穫して、動物園の動物にあげるということは余り聞かないです。ほかではやっていないと思うので、ぜひ名物として露出させてください。

○事務局（酒井円山動物園長） シマウマの裏にあって、シマウマ畑と言われております。

○いがらし委員 皆さんは知っていらっしゃいましたか。

○田中委員 知らなかったですね。

○いがらし委員 委員でも知らないのですよ。

○事務局（酒井円山動物園長） 西町児童会館の子どもたちが動物園の畑をそう呼んでいます。

○いがらし委員 シマウマ畑なんて夢があっていいですね。もっと露出した方がいいですね。知っていましたか。

○林委員 知りませんでした。

○服部副委員長 多分、ストーリーが描かれているものをきちんと示していくことが大変大事で、畑だけですとメディアはまた畑かとなります。開拓の村でも畑をつくっていますけれども、あれだって全然リリースがないような状況です。ここも、そういうことだろうと思います。ですから、今、いがらし委員が示されたような夢のあるストーリーを描けばいいのです。

○事務局（酒井円山動物園長） 子どもたちには、野菜を育て、それを草食、雑食の動物に食べてもらう。しかし、世界の中では草食の動物を狩る肉食の動物もいて、そのふんや死体が土に帰って植物を育てるというふうには、命は全部つながっているのだということを子どもたちに会う機会があればお話をしております。今、やってもらったことは非常に大切なのだ、それをわかって自分たちも食べるものを大切にしようというストーリーで我々は子どもたちと接しているところです。

○林委員 基本的にはメディアには乗りにくい話題です。メディアで言うと、記事で一回というものと、恐らく、ドキュメンタリーにすると、長く取材をかけなければいけません。ですから、いがらし委員に「シマウマ畑」という絵本をつくっていただくのが一番いいですね。是非つくっていただければと思います。

要するに、今、園長が言った話が全部網羅できないと、完結した夢のあるストーリーはできないのです。そうすると、残念ながら、新聞もテレビもだめなのです。テレビでそれを語ろうとすると30分かかってしまうのです。そして、結果を園長に最後に渡すところまで入れるとすると6カ月もかかるのではないかということになるのです。そこで、シマウマ畑をどこでどうするかというと、いつものとおり、種を植えるところしか撮影しないわけです。始まりましたという話だけで、大体は記憶がなくなるのです。ですから、基本的には、そこで何かイベントが起きたり、行ったらおもしろそうなものが見えるなというふうに誘導していかなければいけないと思うのですが、結構難しいのです。それよりも、今、園長が話したように、円山動物園はいい話をたくさん持っているということがすごく大事だと思うのです。それは旭山動物園と全然違います。そういう部分で、どう話題を生かすかではないでしょうか。

ただ、シマウマ畑というのはタイトルとしていいですね。絵本だったら、もしかしたらシマウマがなる畑かみたいな話になると思うのです。

長々とくだらない話で済みません。

○いがらし委員 あえて家庭菜園と言ったのは、今、テレビではすごいからです。女優も無農薬の野菜をつくって、それで番組を1時間、特番で2時間できてしまっているのです。

また、TOKIOがやっているDASH村はもう10年です。農業をやっているものだけを映して、ミルクをつくった、チーズをつくったで10年ももってしまうのは、みんな興味があるのです。

逆に言えば、おいしいところをうまい円山動物園でうまいぐあいにシマウマ畑で発信していけば、一種の動物園の家庭菜園みたいなおもしろい売りという一つのセールスポイントになってもいいと思うのです。ましてや、先ほど言ったように、命の循環を教えるのなら、無農薬というものも大切なわけです。洗っただけで動物にぽんとあげられる野菜です。私は自分の畑でも農薬を使っていないので、トマトを収穫したトマトやピーマンを生でかじるのに幸せを感じるのです。やはり、円山動物園の畑でももいだらそのままぽんとあげられてしまうぐらい新鮮でみずみずしい野菜を草食動物たちが食べていると。

○原田委員長 それはすばらしいアイデアですね。動物園で無農薬菜園を動物のために子どもたちがつくるといことです。

○いがらし委員 いいですね。子どもたちがつくるといのはいいですね。食育ですね。

○原田委員長 これは、一つのストーリーになるのではないのでしょうか。

先ほどおっしゃいましたけれども、チーズをつくる、ミルクをとるなど、牧場が動物園の中にあるというのも当たり前ではないか。本当に、チーズ園とかミルク園をつくるなど、動物がいるわけですから、実際にチューチューと絞らせるということがあると本当の体験になりますね。

○いがらし委員 だから、こども動物園のところに乳牛が何頭かいて、体験チューチューとかね。チューチューといのはいいですね。何かそういうものがあって、展示や行動だけではなくて、実際に牛乳ができるまでみたいなどころまでプラスアルファで体験できてしまうということも、別な意味で動物園として、それこそファミリー的な広がり方がするような気がするのですけれども、どうでしょうか。

○原田委員長 それでは、こればかりではありませんので、議題（2）の中の資料3-2をお願いします。

○事務局（酒井円山動物園長） 前回の会議以降、札幌市の5番目の姉妹都市として韓国の大田市との姉妹都市提携に向けた動きが具体化したしました。その中で、動物交換ができないかという話が市長からございまして、急遽、7月に私も含めて韓国のオーワールドというところに行きました。ここは、サファリもあるのですが、動植物園という形のテーマパークですが、そこの動物交換についての覚書を交わしました。そこに書いてありますように、交換する動物は、円山動物園からはリスザル8頭、オーワールドからはブチハイエナのペアをいただくことになりました。

私も現地に行きましたが、両方の動物園は動物の種類が似通ってございまして、またお互いに欲しい動物の意思がなかなか合わなかったこともありまして難航いたしました。私どもとしましては、今、アジア館の設計に入っておりますが、その後に控えておりますフアフリカ館の中で展示できる動物を考えてブチハイエナを選択したわけで、これがペアで

来ることとなります。

私どもからは、幾つか提案したのですが、結局、昨年と今年に生まれたリスザル8頭をオーワールドに差し上げる形で、既に8月末に動物園から出しまして、今、成田で1カ月の検疫中でございます。10月1日には大田市に到着するところでございます。向こうからのブチハイエナの到着はまだ具体的に日程は示されてございませんが、これも10月上旬になるのではないかとということです。当面、展示する施設としましては、熱帯動物館に入って右側の正面ですから、ライオンとユキヒョウの間に展示する予定でございます。

この件に関しましては、以上でございます。

○原田委員長 ありがとうございます。

何かご質問はございますか。

○服部副委員長 教えていただきたいのですけれども、5番目の姉妹都市ということでの覚書が交わされておりまして、今回はブチハイエナとリスザルを交換するということですね。今まで、4姉妹都市と交換した動物は何があるのか教えていただければ非常にありがたいです。

○事務局（柴田飼育展示課長） 飼育展示課長の柴田です。

1959年にポートランド市と姉妹都市提携していますが、それから10年後ぐらいにこちらからオジロワシ、タヌキを寄贈させていただきました。先方からはアメリカクロクマとビーバーをいただいております。

次に、1972年にミュンヘン市と姉妹都市提携をしていますが、そのときは先方からの寄贈のみでオオカミをいただいております。

次に、1980年に瀋陽市と姉妹都市提携をしていますが、このときは何年にわたって幾つもの交換をしております。先方から寄贈されたものは、鳥類のアオミミキジなどで、こちらからお出したものはフラミンゴやマントヒヒです。

1990年に姉妹都市になりましたノボシビルスク市には、こちらからニホンザルなどをお出しして、先方からはペルシャヒョウ、カワウソをいただいております。

それぞれ寿命を全うしたものもあります。

○服部副委員長 ありがとうございます。

寿命が短くて亡くなってしまった動物は多いのですか。今、残っているのはどれですか。

○事務局（柴田飼育展示課長） 残っているのは、この中にはございません。

○服部副委員長 姉妹都市として大田市と動物交換をするということは大きなイベントで、動物園にとっても大きな出来事だろう思うのです。ポートランド市、ミュンヘン市、ノボシビルスク市が交換した動物がまだ存在しているのであれば、それらをあわせながら何かイベントづくりができるのではないかと、いいネタになるのではないかと気がしました。

まさに姉妹都市の友好ですから、相手の都市とのつながりもしっかりつくり上げていくことができるのです。もっと具体的に言えば、アオミミキジなどをもっと瀋陽市にアピー

ルすれば、札幌市に行ったときには円山動物園に行ってみようというような市民アピールができてくるでしょう。今回そういうことであれば、韓国の人たちに対する働きかけもできてくると思います。その辺は非常におもしろい対策ができるのではないかという感じがしたのです。ですから、大田市の提携に向けた物事に基づいたイベントづくりを大変楽しみにしたいと思っております。

○原田委員長 ありがとうございます。

ハイエナは今までいなかったのですか。

○事務局（酒井円山動物園長） 38年前まで飼っておりました。今度は、円山動物園を入れて五つの動物園で飼育されているということで、余り多くはありません。ですから、今後、アフリカ館の議論が始まっていますので、その中でどういう見せ方が有効なのかを検討してもらおうと思っております。

○林委員 この部分ではしゃべらないでおこうと思っていたのですけれども、気になるので言います。

姉妹提携というのは、経済的なことなどいろいろあると思いますけれども、アジアに対する姉妹提携が今後積極的に行われるかどうかは別にしても、観光に対する誘致についてはすごく大事なことだと思います。実は、私も観光のことでいろいろお手伝いしているのですが、札幌市にとって商品になりつつあるということはここにいる方は皆さんご存じだと思いますし、この中にも観光に尽力されてきた方がいらっしゃると思うので余計なことはいりません。ただ、海外に関して言うと、雪まつりなど幾つか挙がるもの以外にほとんど誘客できるスポットは意外にないのです。この前、私もタイの人たちを誘致しまして、今度は台湾の人たちもやりますけれども、札幌よりも外に行ってしまうわけです。ところが、札幌では、お買い物をする中で、動物園がどういう位置づけにあるかということは今後考える必要があるのではないかと思うのです。観光では、別段大きな収入にならないものとかいろいろ考えはあるかもしれませんが、友好ということと言うと、北京の動物園は結構大きいみたいですが、ないものもあるはずで、ホスピタリティーとか、いろいろあるわけです。そういうものを研究して、おたくの国ではそれはやっていませんけれども、札幌ではやっています、これが見られますというようなことをすれば、僕らも取材に来やすいのです。つまり、韓国の人や台湾の人を案内するわけですから、行かないかという話をすると、「何ですか、何かありますか」ということになるわけです。

僕はタイの人に動物園に行かないかと言ったのです。私もこの会議の委員をしているから、陰ながらそういうことをやるのですけれども、拒否されました。旭山動物園なら行きたいのでしょうかと言うと、旭山動物園も行きたくない、動物園は行きたくないタイの人たちは言うのです。ふだんからゾウを見ているからかもしれません。ただ、そういうマーケティングは必要かなという気がします。

今、副委員長がおっしゃっていることも含めて、姉妹提携して、どういう利用をするのかということです。

新聞のデータによると、北海道で行ってみたいスポットというアンケートがあり、どのくらいの数の外国人に聞いたかわかりませんが、たしか円山動物園が10位に入っていたはずです。僕も、えっ、円山動物園がとびっきりしまして、たしか園長に電話をしたと思いますけれども、その中で旭山動物園は3位くらいでした。

これは、札幌にとっても団体をもてなすときに必要な情報です。観光でジャンプ場まで行くのです。ところが、ジャンプ場の帰りにどこも寄らないのです。まちに戻るのですね。山まで連れてきて、観光スポットが2カ所あったら来てよかったと思うのですけれども、山まで行ってジャンプに興味がない人は、何でこんなところまで連れてきたのだと、景色がいいからという感じしかないのです。そこでもう一つ、イベントリーなものとして動物園があるわけです。そういうものがあると、メディアとしても実は取り上げやすいし、海外のメディアは探しているのです。

海外からの誘致もそろそろ2周目に入ってきていますので、円山動物園に誘引するいい時期なのです。今、旭山動物園が、富良野に次いで引っ張ろうと一生懸命やっているようです。ただ、旭山動物園は距離があって、コースに入れにくいのです。東山はあんな遠いところにありますからね。そういう意味で、ここは立地点がすごくいいのです。

姉妹提携の話ではないでしょうけれども、外国向けではどうでしょうかという話です。
○いがらし委員 そうなのです。

10月に東京から漫画家の友達が来るのですが、札幌だけで帰るのです。どこかにいいところはないかと言うから、円山動物園へ行こうよと言うと、えっ、札幌に動物園があると言われるのです。要するに、北海道というと旭山動物園しかないみたいで、知名度としては断トツに旭山なのです。だから、札幌市にちゃんと動物園があるよと言ったら、すごく驚かされてしまったのです。1泊2日で札幌市内の観光に来て、円山動物園を見ていける、動物園に行けるというリーズナブルな部分ももうちょっとアピールした方がいいと思うのです。

そして、その友達に、旭山動物園は近いのかと聞かれたのです。往復で6時間以上はかかると言ったら、それじゃ東京に帰れなくなるねと。それで、円山動物園は私の家から30分か40分だよと言うと、えっ、そんなに近くにあるのと言うのです。本当に札幌以外の人には認知度が低いのです。だから、札幌の観光の中に円山動物園はあるのだぞみたいなことをメガホンを持って叫ばないと、もったいないと思います。

○服部副委員長 今、林委員がおっしゃってくださったことは大変大事なことで、いがらし委員のお話も大変大きな意味を持っていると思います。

今現在、道内に来る外国人の方々は、去年は69万人になったのでしょうか。ことしは4割アップするというので、このままで行くと96万人、いやいや100万人を超えるでしょうという見方を道の経済部はしているようです。そういう意味では、100万人を超える観光客が札幌に必ず入ってくるわけですから、それらを含めてどのように対応していくかということは、もう手を打っていかねばいけない時代に来ています。当然、お

考えになられて手を打っているのだらうと思うのです。

細かいことですがけれども、例えばパンフレットは英語書きしかありません。五つの都市で姉妹都市提携が結ばれているとすれば、少なくとも友好姉妹都市の5カ国語ぐらいのレベルは必要になってくると思います。今、中国人のビザのバリアがなくなってきた、これからは一気に押し寄せてきます。ましてや、北海道に入ってくる観光客は100万人ではきかなくて、200万人、300万人とふえる可能性は高いです。そこを取り込むのは旭山なのだらうか、円山なのだらうか、釧路なのか、帯広なのかということになるのではないかと思うのです。

ですから、林委員がおっしゃってくれたお考えのとおり、動物園としてもいろいろな面での対策は必要でしょう。そして、もう一つは言語に対するインフォメーションですね。札幌市内でありますけれども、円山動物園にはそのインフォメーションがないのです。円山動物園に行けば札幌市のいろいろなことを教えてくれるということだっていいのではないかと思います。

この前、私は台湾に行ってきたのですがけれども、台湾の所長がぜひ来てくれ、経済界とお話し合いをしてくれということで行ったところ、今、台湾の方は断トツに札幌に来てまして、冬の白さに対する憧れを強く持っているのです。もう一つの色合いでいけば紫ということだったのでありますが、冬の円山動物園はぴったりではないかと思います。やはり、冬、あるいは白というものをしっかり動物園の枠組みの中にとらえて、外国人対応策を持ってほしいと思います。

動物の案内板の表示等、あるいは、こういうしおりを含めてやっていく必要があると思います。そうすれば、五つの姉妹都市に情報を発信できます。これは、札幌市を挙げて情報を発信していただければ、札幌に行ったら円山動物園に行ってみよう、ましてや瀋陽市のキジがいたのだというふうな位置づけで描かれていけば友好的なレベルが強くなっていくのかなという感じがしました。ぜひ、よろしく願いいたします。

○原田委員長 ありがとうございます。

姉妹都市提携にちなんでいろいろなアイデア、ご意見等がございました。

四季ごとにこういう動物たちを見せるということがあっていいのではないかと思います。冬は何を見せるか、それが見やすいようになっているのか。それから、そこでの動物の生き方というか、すまい方がうまく見せられるようになっているのかどうかというあたりはちょっと工夫が要るかもしれません。特に、北海道特有の動物たちが冬ごもりしてしまっているということで、どうやって見せればいいのかということが大きな課題なのではないかと思います。

私は、スウェーデンの動物園を見たときは、本当に寒い国の動物しかおりませんということでした。だから、どこも暖房がゼロなのです。非常に寒かったです。しかし、動物たちは活発に飛び回っているわけです。やはり、そういうような見せ方です。北方は北方なりの見せ方があるのではないかと思います。

冬に一生懸命努力して、室内を暑くして、アフリカの生態を見せる。それも一つあるのですが、一方では、寒いところで、寒さの中で生きている動物たちを見せるという見せ方が札幌らしい見せ方なのではないかという気がします。

時間が押しておりますので、資料3-3へ移りたいと思います。

○事務局（酒井円山動物園長） 資料3-3をごらんください。

今年度に入りましてから、ゴールデンウイーク前にリスザル、プレーリードッグ、ゼニガタアザラシ、ボルネオオウラタン、オオカミといったものが4月、5月にかけて出産しまして、前回ご報告いたしました。その後、6月以降の到着、出産動物の状況でございます。

6月14日に、カンガルー館奥のスローロリスが今年も1頭誕生してございます。それと、先ほど話題になりましたレッサーパンダに双子の元気な赤ちゃんが生まれました。性別はまだ不明です。去年は死産という非常に残念な結果でしたが、今回は非常に順調に生育しておりまして、既に体重が1キログラムを超えてございます。

それから、7月14日にクモノスガメが生まれました。これは非常に繁殖が難しく、動物園では初めてです。産卵から387日目に孵化しました。これは、どういう温度条件、湿度条件で孵化するのかを見きわめるのが非常に難しく、突然孵化したということでございます。3個の有精卵がございまして、残りの2個が今秋9月14日、15日、ざっと数えると499日と500日になると思いますが、合わせまして3頭が孵化してございます。6カ月以上生育すれば動物園としては初ですので、これも日本動物園水族館協会の繁殖賞の対象になるだろうと思います。個人で繁殖されているマニアの方はいらっしゃるみたいですが、動物園としては初ということでございます。

それから、8月21日にエゾヒグマ館に雄の個体を探してございましたが、三笠市でエゾヒグマの雄の捕獲をしまして、それを円山動物園で収容いたしました。育児放棄をされたのか、山の中をさまよっていた雄でございまして、小さく弱々しかったので、動物病院の中で様子を見て、検疫をしておりましたが、順調に体重もふえてまいりましたので、一昨日、エゾヒグマ館の奥のサブ放飼場で飼育中でございます。今後、その辺の生育状況を見て公開の日程等を決めたいと思いますが、当面は、既に入っております雌との個体差が大きいですので、公開するとしても別々に入れかえという形になろうかと思っております。

また、これも今週ですが、熱帯動物館のダチョウです。今は30歳のバロンという雄1頭でございましたが、アフリカ館に向けて雌の導入を行いました。4頭のひな鳥で、1メートルから80センチぐらいの高さの個体が熱帯動物館に入っております。これも、本日から公開ということでございます。

裏面には主なものを書いてございます。

一方、転出した動物でございまして、金澤園長のときに行ったインドネシアフェアで、インドネシアのタマン・サファリ動物園からお借りしておりました日本で唯一円山動物園でしか見られませんということで、1年半、展示させていただきましたコモドオオトカゲ

の雄と雌を返還いたしました。繁殖を目指しましたが、マウントはするのですけれども、完全交尾には至らない状況で、残念ながら産卵までは行きませんでした。飼育展示課としては非常に貴重な経験をさせていただいたのではないかと思います。

それから、8月30日に、先ほど申しましたように、大田市のオーワールド動物園に向けてリスザル8頭が移動いたしまして、現在は成田で検疫中でございます。

動物の状況については、以上でございます。

○原田委員長 ありがとうございます。

何かご質問はございますか。

○田中委員 今年もホッキョクグマの赤ちゃんが気になる場所ですけれども、10月ぐらいからまたクマ館の閉鎖はあるのでしょうか。

○事務局（酒井円山動物園長） 恐らく、交尾の確認は3月末にされておりますので、今のところ11月の中過ぎぐらいから観覧中止という対応になろうかと思います。

○田中委員 ありがとうございます。

○山崎委員 きょう、動物園に来たのは2カ月ぶりでした。今年は圧倒的に来る回数が少なくて、今年に入って五、六回です。ただ、同じ場所に5回も6回も来るというのも、動物園はすごいところだと思うのです。

先ほど、入園者数のお話もありましたけれども、円山動物園は地元のお客さんが圧倒的に多いと思います。そういう方に何回も来ていただくことはすごく大事だと思うのです。

この新着動物や出産の状況は、見ただけでわくわくしますし、これは6月以降ですけれども、前回のものなど、例えば今年1年あわせるとこれだけの動物が生まれて、これだけの動物が妊娠していて、大体いつごろに生まれるか、また、つがいで飼っている動物がどれだけいて、今後、繁殖を目指している動物がどれだけいてという情報が、私は委員をさせていただいているので、こういう紙をもらうことができよくわかるのです。

何回か来ているときに、インターネットなどで下調べして来るお客さんがほとんどだと思いますけれども、中には、赤ちゃんがいることも知らずに、あれ、赤ちゃんがいるみたいな感じのお客さんも結構いるのです。

私は前から思っていたのですけれども、入り口のところにすごく大きいイベントの看板がありますが、あそこは余り張られていないのです。イベントがないときはそうだと思うのですけれども、あその少しのスペースでもいいので、今年はこれだけ赤ちゃんが誕生しました、あるいは亡くなりました、今年はこれだけ期待している動物がいますなどの情報が入り口のところにあればいいと思うのです。入り口から入ったところにあんなに大きい看板があって、えさやりの時間の看板は結構見るのですけれども、これだけ生まれたのかとか、円山動物園はそういうことを結構頑張っているのだということがわかると、全く予備知識のない人にとってはすごく新鮮ですし、次はいつごろ来ようという考えもわいてくると思うのです。

これは前から思っていたので、ここで言わせていただきました。

○原田委員長　そういう看板をつくって、もっと誘導してはどうかというお話でございます。

○事務局（酒井円山動物園長）　実は、あの看板は、山崎委員がおっしゃるように、二つ目の目的があります。

一つは、みんなで一緒に記念写真が撮れるような場所もないので、ああいう前で記念写真が撮れるようなスポットが欲しいということでつくっていただきました。また、あその看板には動物園の見どころを表示しています。ご存じないかもしれませんが、去年もホッキョクグマを初め、幾つかの赤ちゃんが生まれていまして、それらを順番に回ったらいかがですかというような案内表示をやっていましたが、今年はおっしゃられたように、確かにこれだけ生まれていて、そういう親切な案内なりご提案を十分にやり切れていないと思いました。実は、そういう目的であそこをつくっていただいたのですが、十分に活用し切れていないということで、反省しております。

○林委員　この写真のレイアウトは非常にいいですね。はっきり言うと、これはそのまま大きく広げてぺたんと張れば、今、山崎委員はこれをごらんになってすっと反応して、思いのたけをおっしゃられたのだと思います。

やはり、ビジュアルでこういう一番わかりやすいものがあるからこういう意見も言いやすいのです。ですから、これをむだにしないで、拡大して示すべきだと思います。やはり、ビジュアルが一番大切です。去年と今年で違うのは、これだけたくさん生まれたので、案内図を書くと複雑怪奇になってきます。去年は、そんなに生まれていなくて、そういう意味では、あっちへ行ってください、こっちへ行ってくださいと書けますけれども、動物園の味方をしますと、案内図をかくのは大変だと思います。はっきり言って、あっちへ行って、こっちへ行ってとやると、すごく複雑になってくるのです。赤ちゃんラインに行けと言われると、ぐるぐる回らなければいけないのです。上から下まで行かなければいけないのです。そういう意味では、案内図がなくても、これでもビジュアルであつたらいいかもしれませんね。

マスコミで取り上げられなくて、済みません。

○原田委員長　でも、時間のない人は、最短コースを書いておいてもらえると、これだけ回って帰るといふ人もいると思うのです。こういうプリントでもいいのではないかと思うのですが、そういうもので対応していただければと思います。臨機応変に変えられるという感じをお願いします。

ほかにありますでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○原田委員長　よろしければ、次の議題に参りたいと思います。

○事務局（酒井円山動物園長）　次の議題の前に、今年の夏休みに新たな試みとして Kids Zoo Town というものを16日間にわたってやりました。その模様を見ていただいて、簡単にご報告したいと思います。

本州であれば、民間でやっているキッザニアというものの動物園版です。動物園では、飼育もそうですが、それ以外に警備であったり、案内であったり、さまざまな職業の方が動物園の中で働いているということで、それらを子どもたちに実際に気づいていただいて、体験もしていただけるような企画ということで今年にやってみました。

開園直後から、こういう形で並びました。

最初に、さまざまな注意事項を言いました。

飼育のメニューは非常に人気で、数が多かったということで、飼育体験の受け付けは別にしてございます。

これまで飼育体験は、1日飼育など、非常に人気メニューでございますが、かなり時間もかかりますし、限られた人数しか参加できなかったということで、今回は30分単位ではありますけれども、多くの子どもたちに触りだけでも経験してもらおうということで、40個ぐらいの新規メニューをつくりました。やはり、野外の活動が多いので、雨になると中止になるということで、お客様からの不満もありました。

そのほかに、これはJALのキャビンアテンダントの体験です。これは、ショップでのお仕事の体験です。今月で平円になるキッドランドの体験など、これらは報酬をもらえる体験です。先ほどのものは宅配便の体験です。また、園内のアンケートの体験です。それと、円山動物園の広報係の体験ということで、チラシづくりやブログ更新にもたくさん子どもたちに体験していただきました。

これが案内の体験で、これは警備の体験です。それから、1日園長ということでセンター内を見ていただいて、動物園の中の仕事を体験していただきました。

16日間で約2,000名の子どもたちに体験していただきました。事業総括としましては、ほかの事業と合わせて、収支等も含めて次回以降にきちんとご説明したいと思いますが、今年はこのような形でやりました。

現時点における反省点としては、発案から実施まで時間がなかったということで周知不足があったということです。札幌市民の中には、職業体験ということにぴんときていないで、実際にやっている人を見て、自分もやってみて非常におもしろかった、楽しかった、ぜひ来年もやってほしいという声が多うございました。体験した子どもたちの中には、3回、4回、場合によっては5回、要するに5日間繰り返し参加するというお子さんもいらっしゃいました。

あとは、動物園でやるということで、飼育体験に人気が集ってしまったという反省点もございます。我々の意図としては、そのほかのさまざまな職業によって動物園が支えられているというところを知ってほしかったということがございます。そういったことで飼育に集中してしまったということでございます。ですから、来年以降はこの辺のバランスをどうとっていくのか、周知をどうしていくのか、幾つかの反省点もございますので、その辺は総括して、後日ご報告をさせていただきたいと思っております。

この件については、以上でございます。

○原田委員長 ありがとうございます。

何かご質問はございますか。

○堀田委員 実は、夏休みにキッズタウンに子どもと来たのです。ただ、時間がプログラムに書いてあったのですが、わかりにくくて、場所にたどり着けなかったということがありました。そして、気がついたときには募集も終わっていますという感じもあったので、もうちょっとわかりやすい案内だともっと大勢の人が参加したいと思うのではないかと思います。

○事務局（酒井円山動物園長） ありがとうございます。

反省点は多々ございます。

○原田委員長 次回は、もうちょっといろいろな面でよくなっているのではないかといいことでございます。

それでは、よろしいでしょうか。

議題（3）に参りたいと思います。

時間が押しておりますが、開園60周年記念事業の骨子案ということでございます。説明をお願いいたします。

○事務局（酒井円山動物園長） 本題にたどり着くまで相当な時間がかかって申しわけありませんでした。

来年は60周年記念事業をやるということで、どのような考え方でやるかということですが。今は予算化前ですから、基本的な考え方をお示しして、委員の皆様からのご意見、アイデアをちょうだいできればと思います。

基本的な考え方としましては、円山動物園が60周年を迎えたことを感じることができる内容で、多くの方々に来場していただけるよう、単発ということではなくて、1年間を通してさまざまなイベント行事を周年記念事業として行っていきたいということでございます。

展開期間としては、役所は年度なので、平成23年度ということですが、事業により一部前倒しで実施します。といいますのは、来年は60周年の年として、下に書いてありますが、雪まつりからやっていきたいということでございます。

既に主な内容の方に入りましたが、季節ごとの園内、園外のイベントを活用し、周年の位置づけの中で展開していきます。

まず、2月のスノーフェスティバルの内容充実をぜひやっていきたいと思っております。と申しますも、今年度は、9月30日をもって子供の国「キッドランド」が閉園いたします。その後、直ちに撤去作業が始まりまして、今年は大きなスペースがそこに生まれることとなりますので、これをぜひ活用したいと思っております。毎年、スノーフェスティバルということで、円山動物園ではボランティアの皆様、町内会の皆様のお力をかりて冬のプロジェクトを雪まつり時期にあわせて実行してございます。来年は60周年ということもございまして、このような大きなスペースがあるということで、ぜひ有効に活用して、

先ほどから皆様にお話しいただいたような海外のお客様も含めてたくさんのお客様に楽しんでいただいて、それをきっかけに冬の円山動物園の魅力を発見していただけるようなきっかけになるようなイベントができないかということでございます。具体的に内容等については詰めてございませんが、市の観光部とも連携してやらせていただけないかという申し入れをしていきたいと考えてございます。

ということで、もう来年に入ったら60周年モードに入ったらどうかということが一つの考え方でございます。

そのほか、今、見ていただきましたキッズタウン等、夏の動物園の事業等も今年度の反省を踏まえまして60周年の事業にふさわしいものにしていきたいと思っておりますし、春のゴールデンウィークや秋のいのちの感謝祭等の季節ごとのイベントにおいてもさまざまな団体と連携しながらやっていきたいと考えてございます。

協働事業の申し出として、なぜか来年に円山動物園は60周年ですが、うちも60周年とか90周年とか、そういうところがたくさんございまして、ぜひ何かを一緒にやりたいというご提案をいただいているところもございますので、こうしたところのご協力をいただきながら、今後、企画を詰めてまいりたいと思っております。

それを実行していくための運営体制も充実させていかなければならないと思っております。今回のキッズタウン等を運営しましたおもてなし運営委員会をより本格的に拡張していくということと、動物園のガイドボランティアとの連携をより強化するための体制を充実させていかなければならないということです。それから、先ほど服部副委員長から再三ご指摘をいただきましたが、海外、多言語化を含めまして、かなり古くなっております案内表示もございますので、案内表示やパンフレット、園内放送も充実させていく必要があるだろうと考えております。

そのほか、60周年ということをきっかけにといいますか、動物園紹介のプロモーションDVDのようなものも金澤園長の時代におつくりになられておりますが、あれから4年ぐらいたっておりますので、新しいバージョンの映像も必要でしょうし、ポスター等を作成することも必要になってくると思います。今回の市民動物園会議の報告書的な記録資料の充実もやっていかなければならないと思っております。また、サケ科学館等、環境教育拠点施設との連携事業ということも60周年を契機に活発にやっていかなければならないだろうと考えております。

そのような基本的な考え方で円山動物園としては60周年記念事業に取り組んでまいりたいということでございます。

○原田委員長 ありがとうございます。

ただいまご説明がございました。

最初に、基本的な考え方についてご意見をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

これによりますと、多くの方々にご来場いただけるよう、1年間を通して、集中しない

で、年間を通していろいろなイベント、行事を事業として行うということですが、いかがでしょうか。

○事務局（酒井円山動物園長） もう一つ補足させていただきます。

もう一つ大きな予定としましては、来年10月の上旬に日本動物園水族館協会の大きな会議がございます。動物園技術者研究会と言いまして、150名の動物園の技術、飼育関係の人が集まりまして、日本動物園水族館協会の秋篠宮殿下がご来園になられる予定でございます。ですから、これにあわせて会議を円滑に進めることはもちろんですが、これにあわせた記念事業等も考えていかなければならないだろうと思っております。この辺は、殿下と非常にお親しい原田委員長にもぜひお力添えをいただきたいと考えてございます。

○原田委員長 10月上旬の動物園水族館協会の総裁をされている秋篠宮殿下をお迎えして、動物園関係の技術者研究会がこちらで開かれるということですね。これは、毎年、総会が開かれているようですね。

○事務局（酒井円山動物園長） 総会と研究会ですね。

○原田委員長 その一環で来年は札幌ということですね。

○事務局（酒井円山動物園長） 40年ぐらい前に一度です。ブロックごとに受けているのです。来年は動物園技術者研究会を円山で、その次の年に旭山で総会がございます。

○原田委員長 研究会と総会是一緒ではないのですか。

○事務局（酒井円山動物園長） 違います。

○服部副委員長 総会が旭山で、研究会はこちら側ですか。園内でやるのですか。

○事務局（酒井円山動物園長） 再来年の総会が旭山で、来年の技術者研究会が円山です。たまたま北海道の動物園で2年続いて大きなことがあるということです。

○原田委員長 円山でやるというのは、円山動物園内でやるということですか。

○事務局（酒井円山動物園長） 違います。恐らく、パークホテルなど、コンベンション関係ができる場所をお借りして行って、必ず見学会がございますので、円山動物園を見学したり、または札幌ということであれば、サンピアザ水族館か小樽水族館、サケ科学館かはわかりませんが、見学ツアーのコースも組んで、技術者の方に見ていただくことになろうかと思えます。

○服部副委員長 基本的な考え方の問題ですけれども、これに入る前に加藤理事にお聞きしたいと思います。

それは、札幌市としてのスタンスです。この60周年に対してどのようなスタンスで臨もうとしているのか、その辺の位置づけを知りたいのです。それによって、当然のごとく予算化の問題もありますでしょうし、私ども市民会議の考え方も出てくるだろうと思えます。ただ、ぼーんと私どもが出したところで予算が全然ない、札幌市としては知らないよということであれば、また考え方が変わってくるだろうと思えますので、忌憚のないご意見を聞かせていただきたいと思えます。

○事務局（加藤環境局理事） お金がたくさんあれば周年事業にたくさんお金をかけるの

ですけれども、札幌市は基本的に動物園が60周年、何々が何周年、政令指定都市の当番の会議をやりますなど、周年で回ってくる事業には大体決まった金額しかつきません。ですから、例えば、今、園長からお話をしました会議という部分で言えば、会場の借りに要する費用などは単発ですから見ますが、それに伴うイベント、1年を通じてやるイベントに特別な枠を設けてやることに、恐らく、単費で持ち出しをするのは非常に微々たるものではないかと想定しております。

ただ、これを機会に、各種の整備を促進したい。せっかく大勢の方がいらっしゃるのに、5年をかけて直すものを前倒して直したいという部分では多少融通がきくというふうに想定しております。ですから、園内の整備も若干は少し早目にやれる部分はやっていきたいということで財政ともその辺は詰められると想定しております。

○服部副委員長 お金は出さないけれども、意識は十分熟している、あるいは醸成されているというレベルであるのでしょうか。

○事務局（加藤環境局理事） 特に、18年ぐらいからずっと改革が進んできて、この60周年は人間で言えば還暦ですので、新たなスタートみたいな形になろうかと思うのです。そのときに、今までやってきた改革が、今度はしっかりそこから一歩踏み出すという位置づけになっていけば我々としてはいいなと考えております。

今、私どもの内部で、先ほどサケ科学館の話も出ましたけれども、環境教育をこれから充実していくためには、今まではどうしても多くの人に見てもらいたいというショーのイメージがあったものが、そういうところからもう一歩行って、こういうことだったのだというふうに気づいて帰ってもらえるような動物園にしていきたいということを園長も含めてこれから考えていかなければならないと想定しているところではあります。

○服部副委員長 ありがとうございます。

この基本的な考え方ですけれども、今、加藤理事から大変重要なこととお話いただいたと思います。

一つは、60年という還暦であるということです。これは人間界ですから、一つの大きな宇宙として考えると、原点に戻っていかねばならない、基本に立ち返っていかねばいけない、もう一回やり直しをかけるのだというように、生命体にとっては大変大事な60年の歩みだろうと思います。そこを大いに活用していかねばいけないだろうと思います。

もう一つは、リスタート委員会からの基本構想の問題です。基本計画ができて、11年がたち、とりあえずのレベルとして100万人を目指そうということです。そこで、さらなる飛躍をしていこうということで節目の年に当たるわけです。

そうすると、基本的な考え方がまさに基本構想から基本計画としてつくり上げたあの考え方がこの中にきちんとうたわれていなければいけないだろうと思います。厳しい言い方をすると、基本的な考え方ですから、これはとても大事なことです。ただ、いつものとおり1年間を通してやってイベントをやりたいという生半可なレベルの考え方では、

60周年の年にはふさわしくないだろうと思います。

そういう意味では、リスタート委員会の時代につくった、あるいは、そのときからスタートしたあの理念を入れて、行動指針をしっかりとこの中に踏まえて、それを完成させていくのだという強い意気込みがこの中にうたわれていない限り、60年はやっても失敗でしょうね。

総裁が来るから、総裁が一つの目玉ですよということは論外な話であるのです。そういう意味では、わたしの動物園をどういうふうに60年に当たって描いていくのかということをしっかり考え方にうたっておかないと、失敗します。ましてや、これに基づいて、当然、実行委員会が結成されるだろうと思うし、運営委員会も当然のごとく稼働していくことであろうと思います。あるいは、ボランティア、サポーター、寄附していただいている各種団体との連携、すべての面で60周年に対する理念がしっかりしていないと大変だということを申し上げたいと思います。

これを見せていただいたときに、60周年というより、むしろ基本構想から含めた基本計画の考え方が一言も触れられていないというのは情けないし、寂しいし、将来が見えないと言えるのではないかと思うので、この辺について市民動物園会議の委員の皆さんの意見をしっかり入れていただいて、基本的な考え方、理念、60周年に対する歩み方の理念を明確につくり上げておく必要があると思います。

○原田委員長 ありがとうございます。

その点については、リスタート委員会のしょっぱなから動物園を担当されて、牽引された金澤委員は思うこともおありかと思うのですけれども、何かございますか。

○金澤委員 今、服部副委員長が言われたことと同じことになると思いますけれども、主な内容のところを見ていると、①の中のイベントを見たら、スノーフェスティバルということで、雪まつりですね。二つ目が輝く夏の動物園ということで、キッズタウンですね。それから、②、③に至っても、実は動物園のいろいろな機能のうちの本来機能——基本構想の中にうたってきた四つの機能があって、イベント系の機能、環境教育、生物多様性、調査研究の中のレジャー系のところは人数にはね返ってくるから、それはほかの動物園でもみんなやっていて、札幌では残りの三つをしっかりとやりましょうという展開になったわけです。その部分が、この主な内容の中に含まれていないのかなと懸念しているのです。

それがないと、本質的なところが抜けて、スノーフェスティバルにしても、キッズタウンにしても、反省する点はあって、来年に向けて調整しますというところがあるのですが、動物にかかわって動物のことを知ってもらうということがこれで本当にできるのかということが心配です。そういう本来の機能をしっかりとやらないと、1年間いろいろなイベントを組んでいって、1年を通してさまざまなイベントや行事を周年事業とするというのはわかるのですが、これはいつの年だって同じことに取り組んでいるのです。それをもっとレベルアップしたものにしないと、60周年では寂しいと思います。その差が出るも

のを主な内容の中にうたい込んでいかなければならないと思います。サケ科学館との連携での生物多様性ということはできると思いますが、その辺ぐらいしか出てこないかという気がしているのです。そこが寂しいなと思います。

先ほど服部副委員長が言われたように、60周年に何をコンセプトとして、そのコンセプトが基本構想ときちんとマッチしていますという絵にならないと、基本構想は何だったのだろうという60周年になってしまいます。しかも、2011年が集中取り組み期間の最後ですね。その目玉になるものが固まっていけないです。正直に言って、目玉になってくるのは、爬虫類館が来年オープンなので、あれは結構使えると思っています。爬虫類館は、国内にいろいろな動物園がありますが、今回つくっているものはすごいと思います。

それをしっかり売り込んでアピールする場が、きっと、飼育技術者の会議であり、宮様になるのかなという感じもするけれども、そういったところを組み立てられなかったら、毎年の1年と変わらない状態になってしまうのかなというところをすごく懸念しています。

○原田委員長 60周年という節目をどのように演出するかということであり、演出ばかりではなくて、60周年の重みもありますし、札幌市が集中して取り組んだ、集中取り組み期間という言葉が出ましたけれども、今から5年前に、来年の6年目にこれだけのことを集中して取り組みますという宣言をした事業内容がこのようにできましたということもきちんと言わなければいけませんし、その一つとして爬虫類館を来年の大きな目玉として公開する。

そのころは公開できるのでしょうか。

○事務局（酒井円山動物園長） 来年の4月です。

○金澤委員 多分、5月のゴールデンウィークには間に合うのですね。

○事務局（酒井円山動物園長） ゴールデンウィーク前にはあけたいところです。ことしのエゾヒグマ館と同じような時期になると思います。

○原田委員長 そうすると、オランウータン館、エゾヒグマ館、爬虫類館、そしてアジア・アフリカ館に取りかかっていくということが来年の集中取り組み期間の6年目の状況だろうと思います。

いずれにしても、今、いろいろおっしゃられたように、リスタートがかかった動物園がこのように成し遂げたということを市民の人たちにきちんのご報告するということが必要ではないかと思います。それで、こういうふうに見せて、このようにやりましたと。ただ、残っているものも多々ありますが、これから先にこのような方向で展開をしていきたいという宣言と、60周年記念事業として体験的に宣言を行うということが必要なのではないかと私も思います。

ほかに、こういうことを盛り込んだ方がいいのではないか、あるいはコンセプトはこういう考えでいくべきできないかというお考えがございましたら、ご意見をいただきたいと思います。

○田中委員 やはり、60年という間にいろいろな動物たちがいたと思いますので、最初

からいる動物や、何年にはこの動物がいてという履歴的なものを見たいと思います。ライオンのところだったら、ライオンの歴史ということで、最初はこのライオンがいて、今のリッキーになるなど、そういうふうになりやすく個々の動物に対しての説明でもいいですし、どこかにまとめた形でもいいですし、動物に対して何か特別なものがあればいいなと思いました。

○服部副委員長 もう1点、こういう考え方を入れてほしいという意見があります。

基本構想の中に描いていたわたしの動物園としての位置づけの中で、お客様にとっては欠かせない存在の動物園をつくっていきこう、そして認知されていきこうということでリスタートを切ったわけです。その中では、とりあえず100万人という目標数字を掲げましたが、単なる集客性だけで動物園を描いたわけではなくて、先ほど前園長の金澤委員からお話があったとおり、四つの問題を提起しながらそれを達成していきこうということでした。そして、本物の動物園をつくろうということで、それが2011年の位置づけなのです。本物の動物園をつくろうという部分は、ややもすると職員の意識の中に欠落しているのではないかと。そういった意味で、大変失礼な言い方をするのですが、私から見れば、こういった何かわけのわからない、基本的な考え方に落とし込まれないで、ただ文章を一、二行書いておけばいいという安易な考え方が出てくるのではないかとということです。

そういった意味で、60周年に対する職員の皆さん方の考え方はどうだったのだろうか、リスタートしたときの思い、リスタート前の悔しさ、苦しさ、つらさ、悲しさ、こういったものが描かれてスタートを切って、さあ、本物の動物園を目指そうということでみんなが走ったはずですが、それが、多くの方々にご来場いただきたい、まさに集客性だけの物ごとに位置づけられてしまうのでは、基本構想をつくったリスタートのときの職員と私たち委員の熱い思いがどうもどこかに吹き飛ばされてしまっていて、非常に悲しい思いがするのです。

そういった意味では、ぜひもう一回見直していただきたい基本構想の考え方、理念、行動指針を含めて、そこからスタートして、60周年を描いてほしいと思います。まして、この札幌円山エリアをどうするのだという位置づけで動物園はスタートしたと思うのです。それすらも何らアクションが起こされていないのです。札幌円山エリアをどうするのだという議論が全然出てこないし、園の方からも動きが見えないのです。しかし、歴然として札幌円山動物園は円山エリアとしての位置づけをつくろうということでの動きを示したと思っているのです。自然豊かな円山エリアの中核施設として位置づけようと。

そういった意味で、60周年というのは、それなりのイベントと集客性を考えていきこうというものではなくて、本物の動物園を目指しながら、まさにあのときのリスタート委員会をつくった構想を完成させていくということを描いていってほしいのです。そこまでの物事をしてきたはずなので、基本的な精神を忘れないでいただきたいと思います。

時間はもう4時ですから、これから市民動物園会議の中で話をしていくとすれば、さらに1時間、2時間はかかるだろうと思うのです。そういった意味では、大変重要なことで

すから、動物園側と市民動物園会議の委員長の預かりにして、メンバーをつくって動物園と市民動物園会議の中で全員で話すとまた長くなりますから、基本的な構想を練るための考え方を詰めさせていただければというふうに提案したいと思います。

○原田委員長 ありがとうございます。

ただいま、服部副委員長から、いいご提案がございました。この60周年記念事業のコンセプト並びに内容について詰めるワーキンググループをつくってはどうかというご提案でございますが、いかがでしょうか。

○事務局（加藤環境局理事） その前に一つだけ、弁解がましくなって申しわけないのですけれども、今日、私の方にはこういう基本計画の概要版と広報版を課長からもらいました。今、副委員長がおっしゃったように、この考え方が職員から忘れ去られているわけではなくて、これは既に計画的に20年度はやり、21年度はやり、今年度はやり、来年度はやると。要するに、これをやるための事業として3分野で、各分野ごとに20事業だとか17事業など、いろいろな事業がインプットされていることは間違いなくて、それがここにアウトプットされたかどうか問題になっていると思うのです。

基本的に、職員も、この概要に出ている内容については、この前提に立った上で、急遽、ここに持ってきたので、冒頭に言いましたように、来年度の予算で、こういうことをやったらどうだろうか、お金のかかるものでこういうことができないだろうか、そういうことがあれば、そこに集中的にやってみて、変な話、予算上は無理であれば、寄附などスポンサーなどということも含めてご提案いただければということを取り急ぎという趣旨であります。これをすべて忘れていないわけではないということだけは申し上げたいと思います。

○原田委員長 忘れていないということはないだろうと思いますけれども、今年3月で92万人を達成したということで、来年度は100万人達成と数値を言うのは簡単ですが、あと2年を残して92万人まで伸びたということは動物園の方々にとっては恐るべき努力だと思うのです。その結果であろうと私は思います。

ただ、服部副委員長がおっしゃられているのは、それで安心してはいけませんということです。いろいろな要因でそういうふうになった。それを支えたのは動物園を支えているボランティアの人たちも含めた方々の努力です。当然、動物園を運営されている方々の努力ももちろんあるわけですが、そこで方向としてリスタート委員会がつくった構想の内容を確認するということが大事ではないでしょうか。確認の仕方にはいろいろありますし、それをイベントの中に組み込みましようということではないかと思うのです。具体的にどうするのかは、アイデアがないと実現できませんし、その辺を検討するワークを動物園と数名の委員にお任せするという事だと思えます。

多分、服部副委員長の考えは、それをすべてなしにして、これですかということではないと思うのです。そう思いますが、よろしいですね。

そういうことを双方で理解した上で、もう少し具体的な60周年記念事業についてどうするのが最高なのかということを考えていく機会を持ちましようということだと思えます

が、いかがでしょうか。

○金澤委員 先ほど爬虫類館の話をしましたけれども、今回つくっている爬虫類館は、本当に日本国内でも一番になるぐらいの施設だろうと思っているのです。ですから、そういったものをオープンと同時に仕掛けていくということができると思います。それから、オオワシのケージをうまく活用する仕掛けができないかと思います。今は何が入っているのですか。

○事務局（酒井円山動物園長） オジロワシです。

○金澤委員 また、ほかのところもあいているところがありますね。ああいうところを埋めて、生物多様性ということで、まさに今年は生物多様性年なので、それをうまく持っていくと、本来、円山動物園が取り組むと言っていたところがベースに出てくるのではないかと思います。正直に言うと、それは余りお金がかからない話です。アイデアだけで勝負できる部分なので、あとはどうつくり込むかだけだと思うのです。

この60周年記念事業は、もともとはゾウを連れてきたいということから始まっているわけで、それが財政的にだめだったということからずれていったのです。ですから、そういったつくり込みができれば、先ほど服部副委員長が言われた本物の動物園の一部が少し見えていくのではないかと思います。その5年、6年の集大成がここに出てきて、やっと本物に向ってこれからスタートするということで、基本的な考え方が、先ほど園長が見せてくれたようなものにつながっていくのではないかと思います。

先ほども触れましたけれども、余りイベント系で客を集める絵を出すと、アレルギーが出てくるということです。

○事務局（酒井円山動物園長） よくわかりました。

何を60周年というふうに表示するのかという問題だけで、動物園全体としては、まさに本物の動物園を常に目指して我々はやっているわけですし、先ほど金澤委員からお話があった四つの機能を日々努力して充実させております。ただ、ここに書いてあるものは、60周年記念事業ということで、実は理事からもこういう並びの中により研究目的みたいなものをきちんと位置づける必要があるのではないかと昨日も指摘をいただいていたのですが、資料に反映し切れなかったところがございます。

ですから、ベースとしての筋書きとしては、先ほど服部副委員長がおっしゃったようなこれまでの基本計画の集大成として、今、円山動物園が進もうとしている方向性をイベントでの表現だったり、先ほど金澤委員がおっしゃったような爬虫類館など新しいバックヤードのケージを用いてどう表現していくのか、それらをどう60周年事業からスタートさせるのか、ここで集大成にするのか、さまざまなやり方はあると思いますが、そういう形で今までのやってきた内容を整理し直すということです。

甚だ準備不足なペーパーだったので、そういう印象を与えてしまったということは大変申しわけないと思いますが、我々としては、そのように考えておりますので、もう一度、資料の整理につきまして時間をいただきたいと思います。仕込んでいただいたネタはたく

さんございますので、そこを再度整理させていただければと思いますが、いかがでしょうか。

○原田委員長　いかがですか。

○事務局（高橋調整担当課長）　まだ未熟な私がこういう場で発言するのがふさわしくないとと思いますが、こういう忌憚のないご意見をいただいている中で、私も経験が浅い中でいろいろ感じていることがあります。

自分の経験がすべてではないのですけれども、比較的多くの市民がかかわる事業に携わってきた経験から言うと、やっている側の方向性、実際の行動と受けとめていただいた市民の皆様の反応が必ずしも一致していない部分があって、そこを丁寧につむいでいかなければいけないということがあると思います。実際に、リスタート委員会が発足して、ここまでたくさんの人を呼び込めた、そして来ていただいている方々の評価がこれだけ非常に高いということはすばらしいと、来てすぐに感じています。ただ、来ている方々の中には、私も、来ているお父さん、お母さん、小学生など、いろいろ生の声を聞いてみようと思っただけ歩いているのですが、私たちが伝えようとする理念、人と動物と環境、そしてわたしの動物園といったところに大きな違いはないのですが、受けとめ方とこうあってほしいというところには比較的乖離する部分もあったと思います。

まさに、ここまでいいことをやってきたのですが、それを検証する時間が余りなく過ぎてきたのかなという印象があります。60周年に当たっては、まず、集大成として完成させていくこと、そのときに理念、基本計画、実施計画をおろそかにしてはいけないと思いますので、当然、それは言うまでもなく行われることです。先ほど、理事がおっしゃっていましたが、そのとおりなのです。職員一人一人が忘れたわけではなくて、弱まってきたぞ、強めなければいけないなという打ち合わせもあったりするわけです。ただ、そういった中で検証の作業がおろそかにされてきて、この機会をもとに私もできればそういったところにかかわって行って、検証を積み重ねて行って、歩に市民の皆様、来ていただく方々が求めているものを受けとめて、まさに市民動物園会議の場でそれが議論されて行って、両者が求めるものをつくり上げていかなければいけないだろうと思います。

その乖離の部分が何なのかという根拠を私が来てから短い時間で受けとめられたわけではないのですが、ぜひ、その検証作業を含めつつ、来ていただいている方々の意見を受けとめつつ、こういう会議の場などでそれを整理していく時間をいただけたらということを感じています。

○金澤委員　それはすごくいい話で、実は、今年基本計画の下にある実施計画の見直し作業をする年ですね。それで来年、選挙が終わったら新計画になるのです。今言われたことは、その計画をつくる中の検証でやるはずですね。

○事務局（高橋調整担当課長）　もし私が間違っていたら言っていただければと思うのですが、実際に来てたかだか2カ月半ですけれども、いろいろな基本理念に基づいて、どんどん新しい事業などに手を変えて、リクエストにこたえるようにということで、各職員が

非常に頑張って仕事をしているのですが、一人一人の時間的余裕が非常に少ないのです。まさに、この事業の組み立ての中でいくと、今、検証を行って行って、新たに見直しをして行って、新しい運営というところですが、実は、内部の人間が言うてはいけないのでしようけれども、職員一人一人に時間的余裕が本当はないのです。検証する時間が余りなかったのです。そういったところを補てんするためにもしかしたら私が異動してきていると思います。

そう言いながらも、やっていかなければならないことが非常にたくさんあって、手をつけていかなければいけないことがあります。国際化を目指す、園内表示、園外表示、交通アクセスなど、いろいろなことを改善していかなければ、その基本理念を伝えたい人も来ていただけなくなりますので、今、そういうところの整理をやっている最中です。

そういう意味では、ぐちになってしまったかもしれないですけども、そういったものを本気で見直していく時間、来ていただいている方々のご意見をしっかりと受けとめる時間をつくっていかねばいけないと思っています。

○原田委員長 一般的な計画のサイクルというものは計画を立てて、それを実行して、評価を得て、その評価のところを検証し、改善策を再立案するということがP D C Aサイクルと呼ばれているサイクルだと思います。ただ、この計画は、全体の計画として10年間計画なのです。そして、6年目が集中取り組み期間の終了期間ということで、そこまでは頑張って投資もするし、動物園も頑張りますということで、そういう計画内容で非常に密度の高い計画になっていると思いますが、それを持って集中的に取り組んだ後は少し軌道変更があるかもしれませんという意味で評価を検証して、起動修正をするかどうか、どれだけはっきりした改善策を導き出すかが6年目の仕事だろうと思います。

ただ、これは記念事業ですので、こういう計画で進んでいます。これだけ集中してやってきましたと。これに対して皆さんはいかがお考えですかということに参加していただいて、市民の方々にお伺いを立てるとのことだと思っております。

その評価、検証というものは動物園サイドで、裏でするかどうかわかりませんが、見え見えなのかもしれませんが、それはこの計画のステップとしてやらなければいけないことです。ただ、記念事業で検証をテーマとしますというわけにはいきません。だから、今後6年以降に取り込んでいく新しい一歩も少し交えて、本当にそういう方向でいいのかどうかを検証していかないと過去の検証だけでありますと将来がなくなりますので、これから仕掛ける内容も一部含んで検証されたらいいのではないかと思います。

これは、全く並列で進められることですから、それで行けるのではないかと思います。

○林委員 意見をいいですか。

僕は、副委員長が攻めに回ると守りに回っていますので、そういうふうに聞いてください。

基本的には、6年という中で、私はリスタート委員会に入っていないのですが、基本的にはリスタート委員会がどのように始まったかという歴史は、市民の方もすごいと思われると

思いますけれども、それは悲惨な状態から始まっているわけです。僕も、ここに入るときに非常に覚悟を決めたのは、このリスタート委員会の方がいらして、尋常ならざるところに飛び込んで話をしたのです。いろいろなパフォーマンスもあったでしょう。というのは、立ち上げていくために、お金もないのに元気を出そうということがありましたでしょうし、いろいろなことがあったと思います。

ただ、それから6年たって、つまり、持続可能性のある運動体にしていかなければならないのが今携わった執行部の方々だと思うのです。その部分においては、非常に厳しい状態においては、非常に刺激的なことを常にやり続ける、その中において発展していくことがすごく大事です。非常に難しいのは、原田委員長がまとめられたように、両方をやっていかなければならないということに尽きるのです。ただ、一方で、執行側の弁護をするわけではないですけれども、持続可能な運動体にしていかなければならないのが今の円山動物園の管理側の大きな課題であります。それは、金澤園長のときに持っていた課題よりも大きいです。

問題は、極めて厳しい経済状況の中で、僕は上田市長でもないのに理事の前で言いますが、さあ立ち直れといったときのお金とそうではない向き合いで言えば、札幌市の中でも理事は極めて一生懸命頑張っていらっしゃると思うのですが、少しずつ冷やかになってきているのです。それは確かだと思うのです。

そういう中で、市民会議をうまく使っていただくという意味だと思うのです。うまく使っていて、次のエンジン、次の油が必要であれば、市民を巻き込んで、検証するのに時間がかかり、時間がないのにやらなければならないということも理解できますが、逆に市民を利用することもぜひやっていただいて、次の6年目からの新たなスタートを、原田委員長が先ほど言った両方のスタートを実現するのに、私たちも応援しますという意味だと思うのです。

こんなことを言っただけは失礼ですが、理念を守ろうという人がいないと絶対にだめなのです。そういう意味で言うと、その理念は、はっきり言うと、副委員長とちょっと違うのは、いっそのこと、基本的な考え方を入場者100万人と書いていただけていいではないか。なぜかといったら、その中にはすべてのことが入っているわけです。100万人に対してどういうサービスをするのか、100万人を呼ぶためにどんなイベントをするのか、呼んだ人たちをどうやってリピーターにするのか。先ほど、山崎委員がすごくいいことを言ったのです。5回来る、こういう人をどうするのだということ。100万人になっても、その次に90万人になってしまったら、その100万人は意味がないのです。そういう意味合いで言うと、旭山動物園と違う道を歩み始めたわけですから、執行部の方はぜひ市民を利用していただいて、こういううるさいおやじをうまく利用していただいて、足りない力と呼び起こすということではないでしょうか。

リスタート委員会はそうだったのではないかと思うのです。僕も、会合の記録を読むと、悲惨極まりないのです。これは本当に立ち直るのかという状態だったのが、ここまで来て、

まっとうなと言うと失礼ですが、動物園の話ができるようになりました。

しかし、これを緩めてはいけないという思いがきつとあると思うのです。それでリスタート委員会の方は、戻るといふ恐怖感があるような気がするのです。僕は、そこまで戻らないのではないかと思うのだけれども、あの悲惨な状態から進んだ方には、やはり戻るといふ思いがあると思うのです。でも、これは心しないとだめだと思ふのです。企業人でもそうですけれども、成長していく間で、一瞬、一気に戻る瞬間があることをだれかが言わなければいけないので、それはこの会議の大きな役割なのかと思ふのです。そして、弁護する側で言うならば、どちらかというときぜひ利用していただきたいということです。

○事務局（高橋調整担当課長） 本当に勝手なことばかりお話しさせていただいて、申しわけないと思ふます。

寄附の話もたくさんあって、細かな金額でたくさん寄附をいただくということで、その件数が人気のバロメーターになったり、入園のバロメーターになっていくということが私としては非常によく理解できるのですが、実は、寄附というのは、市の一般財源として入ってしまうのです。動物園が使えるお金にめぐりめぐってはくるのですけれども、実際に予算の枠がふえていくということではありません。例えば、寄附をしていただいたお客様に懇切丁寧なサービスを深めていきたいといったときの財源にはつながらないのです。

例えば、そういったものも、私たちは知恵を出して、来ていただくお客様方のリピーターの皆さんにサービスできるものの向上を目指すとしたら、何かしらの財源として少しでも確保する手法はないか。そういったものをもってお客様に対するサービスを向上させることが新しい手としてできないかという部分で仕組みを考えている状況です。

そういう意味では、いろいろなことを言って申しわけないですけれども、基本理念や、ここまでの成功事例があるわけですから、それを後退はさせたくない。ただ、それを現実的なものと持続性を持たせること、変化を持たせるためには、やはりお金と仕組みが必要だという部分で、そこを本当に考えていきたいですし、考えなければ難しくなっているのだということを感じております。

そういったところも、これからこの会議の場でいろいろご提案させていただいて、事業化を図れるような手法を皆さんと相談しながら積み上げてまいりたいと思ふます。

○原田委員長 一言で言うてしまうと、とにかく最初にこれはどうすればいいのだろうと思つたぐらい、数値を見たら大変だったのです。それで再生、リスタートという言葉が使われたと思ふのです。そのときの最初のイメージは、とにかくイベントを多くして人を集める。これで人はたくさん集まるだろうと思つました。しかし、飼育員への負荷が非常に高まって、あるところで限界が来まして、そこからは下降線をたどる、やめてしまう人が出てしまうぐらいで、そこで動物園は崩壊していくのです。そういう道を歩まざるを得なくなるのです。それを防ぐためには、サスティナビリティ、サスティナブル・ズー、安定的に持続する動物園でなければやっていけないのではないかということです。そのためには、とにかく飼育員の負荷をある一定のところまでとめておいて、そのほかは産業のかなり

中枢まで入り込んでいて、生産性まで左右している電子化の技術を動物園は導入すべきだろうと思います。

動物が動くということは、彼らは別にイベントと思っているわけではなくて、生き延びるために動いているわけです。それをサービスとして提供できるということは、素晴らしい付加価値を労なくして提供できるということです。それを見ているうちに動物園に見に行きたくなるというシステムをつくれば、これはいけるなと思います。

だから、入園者数が10万人ふえても1人当たりの入園料は300円ですね。600円だけれども、無料の人たちが多いので実は300円なのです。そうしますと、10万人入っても300掛けると3,000万円です。先ほどの92万人に対して来年は82万人だと。そうであれば、3,000万円を5,000円で割ると600です。アニマルファミリーを600件ふやせば、それで事が足りるのです。10万人を集めるイベントに対する飼育員の負荷をプラスアルファするということと600件を集めて3,000万円を得る、それをどう仕組むかという知恵を出すのです。知恵を持っている人はいっぱいいるので、そういう知恵を集めるのです。今、技術は非常に安くなっています。それを導入すると、いけるのではないかということです。それによって持続的安定性が保てる道があるのではないかと思います。

経産省のお金をとりまして実験をしてみたところ、反応が非常にいいのです。100人のモニターに対して、みんなが動物園に行きたくなってしまおうと言ってやってくるわけです。そういうような実験例もあるので、私はぜひ、ここで実態的にテストをして、検証していただきたいと思います。

その思い込みの違いはちょっとあると思います。つまり、構想は構想だということで、構想を守るというよりも100万人と言ってしまった方がいいのではないかという考えですね。ただ、100万人を持続するためには、そこにシステムが必要なのではないかというのが私の考えです。どんなことをやっても100万人ということではないだろうと思いますし、多分、そういう意味ではないと思います。

○林委員 シンプルにみんながわかりやすくやろうというふうに言うと、いろいろなことを書くよりも、副委員長が言うことは裏ではしっかりとみんなが共有していかなければならないことで、どうするのかといったときに、100万人を目指す、そのために60周年で事業はやらないけれども、市民を巻き込んで何とかするというシンプルな出来事を、僕はどちらかというメディアですから、そういうことをすれば、そのかわりシンプルになった途端に僕たちや市民がそこに命を込めるみたいなことをやっていくことが大事ではないかと思います。

60周年で、先ほど田中委員が言われたけれども、こういう話ですっとなってしまいましたけれども、60年間にたくさんの動物が生き死にしているわけですね。ここには命のリレーがあるわけです。それは、子どもたちにとって大事なことでけれども、実はここに来た人たちの命のリレーもあるのです。

うちのじいさんも来たし、ばあさんも来たし、一緒に手をつないで来たわけです。そんなことは、毎年、毎年は言っていられないけれども、60年のときは言えるのです。CMをつくらうと思えば僕はつくれます。60歳になって、あの坂道の同じ場所で同じように写真を撮った人たちを集めて、同じように見たときに、恐らくそこに自分たち自身をそこに投影すると思うのです。それぐらい動物園は記念すべき人生の中の大きなモニュメントになり得るのです。

僕は、田中委員の話からぼっとそういうヒントを得ていて、これもお金がかからない方法なのです。未来の動物園は、もしかすると、動物園に行けないおじいちゃんやおばあちゃんと一緒に家の中で絵本を楽しむ、行ってきた人と一緒に楽しんできたよということを言えるような時代だということを、できれば円山動物園が、どこよりも最初に、発信してほしいという熱い気持ちなのではないでしょうか。

○原田委員長 二番煎じは苦しいのです。先端を行かないと。一步でも先に行かないと。

○事務局（酒井円山動物園長） 先ほど私も補足で言いわけをさせていただいたように、60周年記念事業のとらえ方がかなり甘かったと思っております。これまでの基本計画に照らして集中取り組み期間の最終年をここで総括するという位置づけから、来年の60周年記念事業を組み立てて、案をつくりまして、次回の委員会の前に、委員からご提案がありましたように、そういうプロジェクト的なメンバーにご相談をさせていただくような場面をつくって、次回の委員会ときには皆さんにご承認いただけるようなプランにしたいと思えます。

その辺の調整は、どなたにどういうふうにとすることは……。

○服部副委員長 どちらにしても、予算の絡みで議会の関係もあるでしょうから、早目に市民動物園会議をもう一度開けるようにしていただければと思います。

いずれにしても、林委員が私の思い、委員長の思いをしっかりと語ってくれましたが、そのとおりだということです。しっかりとした60周年になるよう、市民動物園会議を活用しながら、利用しながら、ともに歩みながらいいものをつくり上げていくということです。それが市民に喜ばれる、あるいは市民動物園としての位置づけがそのときに初めて本物の動物園として誕生すると思えますので、よろしく願います。

○原田委員長 それでは、議題（3）の開園60周年記念事業の骨子案についてはここまでとしたいと思います。

次は、次回の議題と日程調整についてでございます。

○事務局（酒井円山動物園長） 次回は、服部副委員長からお話がありましたが、正式には年明けにというふうを考えてございました。

○服部副委員長 予算的には間に合うのですか。

○事務局（酒井円山動物園長） また皆さんに集まっていただくかどうかということもございまして、基本は1月の中旬以降にやることにさせていただいて、内容についての詰め、ご相談を、別途、予算に間に合うような時期にさせていただくということではいかがで

しょうか。

それについては、別途調整させてください。なるべく早いうちにできるようにしたいと思っております。

○原田委員長 市民動物園会議をもう一度というよりも、予算どりというか、60周年記念事業の内容についてももう少し詰めた案をつくって、議会の後になるかもしれませんが、1月の中旬ごろに次回の市民動物園会議を開くということによろしいですか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○原田委員長 何かこれだけというご意見等がございましたら、動物園側にでも結構でございますので、どしどしとお寄せいただければと思います。

3. 閉 会

○原田委員長 それでは、予定の時間をはるかにオーバーいたしまして、まことに申しわけありませんでした。でも、いい議論ができたのではないかと私は思います。

長時間、どうもありがとうございました。

以 上